

平成 28 年 10 月 18 日

西日本国際財団

「留学生のための別府体験旅行」実施報告書

今年度の留学生のための研修体験旅行は、別府を目的地とし、初めて当財団の目玉事業であるアジア貢献賞の受賞者がおられる場所を訪問することとした。以下に詳細について報告します。

1.日時 平成 28 年 10 月 10 日～10 月 11 日(一泊二日)

2.目的地 大分県別府(立命館アジア太平洋大学、太陽の家、地熱活用農園「ラボ縁間」等)

3.参加者 26 名(留学生・OB 21 名、日本人 5 名)

(留学生の・OB 出身国別内訳: 中国 6 名、インドネシア 3 名、インド 3 名、スリランカ 2 名、ウガンダ・イエメン・ベネズエラ・ルワンダ・ドミニカ・キリバチ・ミャンマー各 1 名)

4.スケジュール

10 月 10 日(月)博多駅発⇒立命館アジア太平洋大学⇒別府市内観光

10 月 11 日(火)地熱活用農園見学⇒社会福祉法人「太陽の家」見学⇒帰福

6.事業名 人物交流事業

7.事業の詳細

(1)立命館アジア太平洋大学(以後、APU と表記)訪問～10 月 10 日午前 11 時～午後 3 時

・2008 年以前には人物交流事業として APU を継続して訪問していた時期もあったので、今回、第 17 回アジア貢献賞に APU の学生団体 PRENGO が受賞したことをきっかけに APU 本部と交渉して福岡の留学生と APU の学生の議論、交流の場を持つこととした。

・昼食の後、APU 側約 30 名、当方 26 名が会議室に集まり、それぞれパワーポイントを使って発表を行い、質疑応答、ディスカッションを行った。

・具体的には、大学側から APU の概要を説明いただいたあと、APU の学生公認団体でアジア貢献賞受賞者の PRENGO、途上国の居住環境改善に取り組む Habitat APU、途上国の支援活動を行っている外国人学生主体の Connext Asean の 3 団体からの活動内容を聞き、福岡県留学生会や九大留学生会の学生との質疑応答、ディスカッションを実施。

・また、福岡県留学生会、九大留学生会、CIP(福岡の留学生の就職先を SNS を使って探す元留学生の取組団体)の3つの団体からそれぞれの活動を説明、APUの学生からの質問に答えた。

・大学と学生団体の説明を聞いて、6千人の学生の半分以上が留学生という日本の他の大学とは一味違うAPUのグローバルな発想、学校づくりに驚かされるとともに、日本人の学生も外国人の学生も英語を共通言語として学んでいるからか、学生たちは縦じて生き生きとしており、新しい発想、自発的で国境や国家よりも人間として助け合うのは当然と考えていることを感じさせるような力強い意思が感じられた。

・双方の学生ともお互いの生活環境、大学の環境の違いなどに新鮮な驚きを感じて勉強になったと話していた。

・ホテルでの夕食会にもAPUから6名の学生、大学秘書室の伊藤課長をお呼びして交流し、それぞれの学生生活や卒業後の進路、就職状況などについて意見を交換した。

(2) 社会福祉法人「太陽の家」訪問～10月11日午後2時～午後4時

・もうひとつの訪問地として「太陽の家」に向かった。ここの企業の中にスポーツ用車いすを製作、修理、指導する「大分タキ」という企業があり、そこに第8回アジア貢献賞受賞者で同社の上野茂さんという方がおられるので、APU訪問と同様アジア貢献賞受賞者から話を聞いて学生達の参考になればと考え訪問地として選んだもの。

・上野会長(83歳)はもう60年近く車いすを使っておられ、ラオス等の東南アジアの障害者スポーツのために日々車いすの改善、車いすスポーツへのアドバイスを続けている。

・「太陽の家」は1964年に東京パラリンピックを提唱し、その選手団長を務め、「保護より機会を」「世に身心障害者はあっても仕事に障害はありえない」と障害者の社会参加、自立とスポーツにその生涯を注いだ中村裕医学博士が1965年に創設した障害者雇用の社会組織で、地域の人も自由に出入りでき、障害者も自立して生活できることを目標に多くの支援者・企業が支えているところ。

・「太陽の家」の広大な敷地内には社会福祉法人太陽の家の本部以外にオムロンなどジョイントベンチャー企業8社が操業しており、その中でも印象的だったのは障害者目線で自動販売機から交通信号のスイッチまで随所に工夫が凝らされていて、障害者に対する深い愛情と自立を支える社会の強い「意思」が感じられた。

・留学生達は見学を許されたオムロンの工場で、流れ作業の中、障害者の従業員の方々がそれぞれの障害の度合いに応じて工夫された作業に没頭しているところを見て、障害者の方に働く場所そして健常者と同じように生活し自立できるよう配慮の行き届いた生活環境に驚いていた。

・またこの「太陽の家」を案内してくれたネパール出身の APU 卒業生で太陽の家総務部スタッフの Karki Bilam 氏は、在学中から障害者に興味を持ち、審判などをした後「太陽の家」に就職したとのことで留学生たちから様々な質問を受けていた。APU と太陽の家がこのような形で結びつくとは予想外だったが、参加した留学生たちも自分たちの国の障がい者の生活環境と比較して勉強になったと話していた。

(3) 地熱活用農園「ラボ縁間」訪問～10月11日午前中

・鉄輪温泉の温泉熱を利用してブランドいちご栽培の実験農場や温泉噴気のかまどで魚介類や野菜を調理する「地獄蒸し」体験レストラン、竹細工工房などユニークな観光施設となっている「ラボ縁間」を訪問、ブランドいちごのハウス栽培の見学、レストランでの食事を楽しんだ。

8. 今回の体験旅行の反省と課題

・今回は前回の宮崎県五ヶ瀬町での神楽鑑賞・自然エネルギー実験視察・ブドウ狩り・農泊体験といった留学生が自ら体験する旅行から、アジア貢献賞受賞者のおられる場所である大分県別府の APU と太陽の家を中心に学生との交流、太陽の家では障がい者雇用のあり方視察を中心の旅行に切り換えた。

・五ヶ瀬町のように日本の伝統文化習得や体験型の旅行ではないため、そのような体験を通じた「学び」ではなく、APU の学生達との交流、日本の障害者雇用の先駆けとなった「太陽の家」見学による障がい者雇用の日本における実態について多少なりとも留学生達の日本理解に役立ったのではないかと考える。

・今回初めて当財団のメイン事業であるアジア貢献賞と人物交流事業を有機的につなげる試みを行ったが、今後も出来る限り当財団が長年にわたって蓄積してきたアジア貢献賞やアジア Kids 大賞受賞者の人脈を地域と外国人とをつなげる人物交流事業にも活用していければと考える。

・ただ、今回は留学生のグループ同士による発表会のような形式はとらなかったことで少し訪問先に関する事前調査といった留学生の前向きな学習態度を引き出すまでにはいたらなかった。(宮崎県五ヶ瀬町では毎回町の発展に関しての提案・発表会を実施している)

以 上